

HOLLYWOOD DREAM

ハリウッド ドリーム 汗馬の嘶き



” TAKE A CHANCE” と “GETOUT” 映画ポスター

あっと言う間に9月になった。今年もあと4ヶ月。

散歩に出る前、いつものように朝のコーヒーを楽しみながらニュースを見る。

最近インターネットで日本の新聞も読む。進歩である。

我が親友、郷田兄はコンピューターを持ってないようだ、噂によるといまだ原始人のような生活をしているようである。断っておく、これはあくまでも噂である。

思うに武道に生涯をかけている人は古き時代に生きているのである。

IT革命など関係がないようだ。本音は科学技術に付いていけないのであるかも！

本題である。インターネットでHOLLYWOODの最近の映画、**Once Upon a Time in Hollywood**の監督クランテノー {QUENTIN}と主演役者リオナルド {LEONARDO DICAPRIO}が映画宣伝の為か来日していた。その発表会、通訳を添えて話をしていた。

映画の話も面白かったが、ハリウッドについて話が弾んだ。

曰く、ハリウッドには世界中から、それぞれの自分の持っている才能を信じ、大きな夢抱いていろいろな人が訪れる。と語っていた。

何となくではあるが私も、もし映画の世界に生きるならばやはり本場ハリウッドに行くべきだと思う。同感

である。

リオナルドの話が続き、夢を持って頑張っても現実はその夢をつかむのは厳しい。むしろその途中で夢をあきらめる人が殆どであると言う。

私は自分の夢は追いつけるべきだと思う。

この歳になってつくづく気が付くのだが、失敗や難しいそうだからと言って自分の夢を追いかけることを止めてしまうのでは人生が淋しく感じる。

夢を持ったなら、情熱をかけてその夢の中に生きることだ。

苦しかったり辛かったりしたら、夢をつかんだ時、その瞬間の自分を想像したらいい。

失敗を恐れたり、人に笑われるかも、バカだ・・・とか、周りの人間の眼を気にしがちになるが、他人の人生ではなく自分の人生である。

たとえ失敗しても自分の人生を生きた事なんだから、恥ずべきことではなくむしろ誇りに思えばいい。

とくに自分が見いだした世界から生まれた夢は追いつけるべきだと思う。

私は自慢じゃないがこの歳になっても毎日のように失敗を繰り返しているが自分の世界、カラテ道に生きている幸福を毎日味わっている。

なんか話がアッチに行ったりコッチに行ったりして可笑しくなってきた。

エッセイを書くのが久しぶりなので調子が今一である。

題名のハリウッド ドリームに戻る。

クランテノー監督とリオナルド俳優の話聞きながら、自分の事、“TAKE A CHANCE”映画を作ると言った時の周りの人間を思い出した。

昔書いたエッセイと重複するかもしれないが当時を思い出しながら話す。

昔から映画は好きだったが、まさか自分が映画を作るとは夢にも思わなかった。

まだ内弟子を指導していたころ、一日の激しくきつい稽古が終わった食事時、のどを鳴らしながらビールを飲み、晩飯の野菜炒めや、水炊きの鍋、チゲ鍋を囲みながら内弟子君たちと稽古の事だけでなく色々な話題を語り合った。

NHKの朝のドラマに内弟子物語など良いのではないかと、ある内弟子君が言い出した。

みんなの目が輝きだして、そうだ、そうだ・・・と言い出した。

IT革命、AIのこの時代に、タイムトンネルで200年以上も昔に遡り、朝から晩まで突いて蹴って汗を流している若い人達。そんな世界が日本ではなくアメリカのそれもデープサウス {深南部} のアラバマにあったのである。

日本の社会から忘れられているような古すぎる内弟子制度が生きているなんて、まさに神話の世界の話である。

重ねて言うが、科学技術が驚異的に発達して現代に封建時代の雰囲気漂いあふれる内弟子生活をしている若者がいるということはホント奇跡的な事のように思う。

その厳しい内弟子の生活の中には色々な意味で青春が溢れていたように私には見えた。ちょうど、最後の内弟子だったマサ、彼の毎日の生活の中で見せた、葛藤、苦しみ、悲しみ、喜び、それらの自己との闘い、そして成長を書いてみよと考えた。

本を書きながらこの話、映像にしたなら今の若い人達にそれなりのインパクトがあるのでは・・・その思いがだんだんと熱くなり、遂に私の情熱にまでなった。

なんとか実現させようと、その気持ちがされに膨らみ私の使命のようになった。

いざ歩き出すと、前途はまさに真っ暗であり出口も光も見えなかった。

ただ心の底にもし俺がやらなかったら誰がやる。

気合いが入ったが、一歩出る前に色々と悩んだし、考えた。

世の中にはいろいろと面白いと言うか変わった話があるが、70歳をとうに過ぎたカラテ家が全く未知の世界だった映画を作りたいと言い出したらきっと頭が可笑しくなったと思う人が殆どであるように思う。現実には全くその通りになった。

これまでカラテの技術書やビデオを何本か出したことはあるが、映画の脚本を書いたことはなかった。ない才能と言うか能力を絞りに絞って書き上げた脚本を見せて映画をつくると言ったら、娘や息子に「お父さん気が狂ったの！」と言われ、家人には「気は確かですか？・・・貴方、ドクターに見てもらいましょう」と真剣な顔つきで言われた、そんなカラテ家は私が初めてではないかと思う。

しかし私は頑張った。汗水たらしながら、悪戦苦闘を繰り返しやっと脚本 {正確に言うと脚本らしきもの} 書き上げたのである。簡単にあきらめる訳にはいかない。

生きている事は全てにチャンスがある事である。そこで頑張って、走り続けたのである。

この世の中、やはり夢を実現させる為にはなんといってもお金である。

しがたないカラテ家には映画を作るお金などある訳がない。

そこでさらに頑張らないといけなかった。

息切れがする歳であるが、頑張ってまた走り続けたのである。

ほとぼしる情熱をもって映画の話と脚本を見せ2~3の実業家、某出版社のCEOに出資の話を持ち掛けたところ、なんと以外にも「ふ〜ん、いいアイデアだ、億単位の金を出そう・・・」との返事をもらい、舞い上がって唄い踊りだしてしまったカラテ家も私が初めてではないかと思っている。

ところが、である。世の中そう簡単にはいかなかったのである。

いざ現実に映画製作が具体的に進み、撮影の日が決まりかけてくると、出資を約束してくれた人たちが、なぜかそろって「う〜ん、アツ映画ね〜…いま厳しいからね〜。まあ〜頑張りなさい、作品が出来たら知らせてください、切符の2~3枚は買ってあげるよ」で終わってしまい、結局出資者に逃げられた。こんな惨めと言うか、悲しい経験をしたカラテ家も自慢じゃないが私が初めてではないかと思う。

いや、この手の話は結構多いかもしれない



千葉さんと息子マッケンユー15歳

ところが私は諦めないで頑張ったのである。マタマタ走りだしのである。
アッチコチに駆けずり回り何とか最低限度の資金を集めたのである。
情熱がさらにエスカレートし、私がなんと監督、出演し、いま日本で人気絶頂の新田真剣佑{マッケンユー}、私の映画“TAKE A CHANCE”のオーディションの時はまだ彼は15歳であった、そのマッケンユーをオーディションで見出し、そのまま映画初出演のマッケンユーを主役に起用して、撮影を開始してしまったのである。映画の世界全くの素人が、練馬のマサやSFのタケシ、アラバマのカール、おまけにアトランタのツトム、その他の生徒の応援で遂に映画を完成させてしまったのである。
そんなカラテ家は私が初めてではないかと思っている。



撮影お疲れ様でした。

人間の一生、生まれてからやがて幼稚園に通う人、いかない人もいるがとにかく成長していく、小学校～高校・・・と進み社会に旅立つ。
生きていくその道に、希望と挫折、喜びと悲しみ、愛情と憎しみ・・・いろいろな喜怒哀楽を経験をする訳である。

何となくではあるがこの歳になって言えることは自分の世界を見つけることである。
その自分の世界に徹し、自分と戦い、努力精進すると、そこからいろいろな夢が生まれてくるように私は思う。その夢を追いかけるのが人生ではないかと思う。
たとえ、その夢の途中で倒れたとしても、その人は自分の人生を全うしたのではないかと私は考える。

カラテの世界に出会えた私はホント幸運であると思っている。
すべてはそのカラテの世界から生まれた夢である。
毎日意識してカラテの技や動き、自分自身も含めて生徒の事を考える時間を持つが、普段のなにげない日常生活の中でフットしたときにカラテの技や動き、生徒の事が突然に浮かんでくる時がある。
とくに朝の散歩、“アッ”という閃きが起きる時がある。
自分の世界を意識して練って鍛えて、無意識の世界までもっていく。

その世界からある日、突然大きな夢が生まれる。

生きている事はチャンスなんだからとにかく一歩前に出ることだと思う。

走れるときに走れ！跳ぶときに跳ぶ！

健康第一 オス